

母が仲間と一緒に本を出版した。本のタイトルは、「バリアフリー住まいをつくる物語」(高齢社会の住まいをつくる会編、三輪書店)。母はバリアフリー専門の建築士である。四十年ほど前に彼女が障害者住宅の設計を始めた頃は、「バリアフリー」という言葉さえなかったそうだ。この本には長年現場に携わってきた彼女からのメッセージが込められている。それは、安全で居心地がよく、住んでいる人が「バリア(障害)」を感じずに生活できる家が「バリアフリー住宅」だということ。手すりをつけて段差をなくせばバリアフリー住宅になるのではない。母は、施主の家や工事現場に私をよく連れて行った。そのため私は小さいころから障害のある方と接する機会に恵まれた。「できないこと」の多さを嘆くのではなく、自分が「できること」を見つけて伸ばして前向きに生きることの大切さを、彼らは教えてくれた。共著の小島直子さんは、そんな

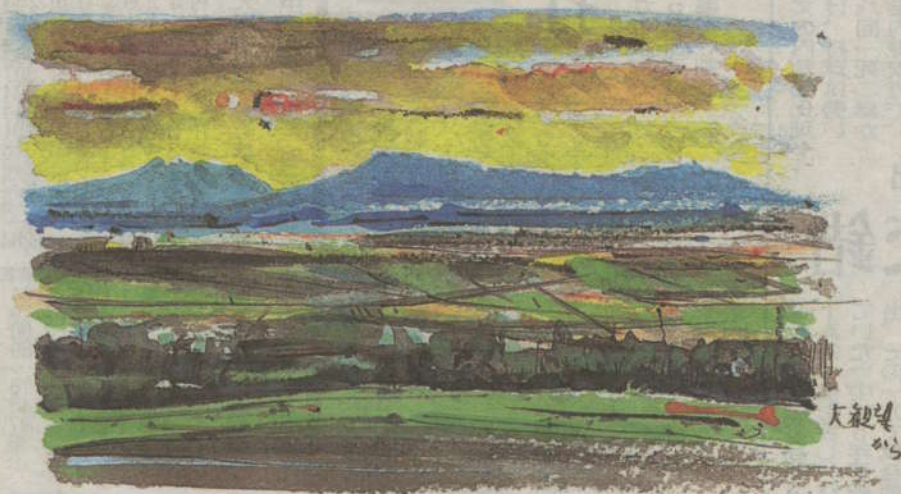
# 南阿蘇

吉田 愛梨



## 里の風

### 住み続けるために



絵・有働 孝昭

前向きな障害者の一人。電動車いすを使い、二十四時間態勢の支援を必要としながらも、念願の海外留学まで実現した。手は反り返っていてわずかにしか動かないが、

工夫をして包丁やパソコンを使いこなす。五体満足でも料理をしない人がいることを考えると頭の下がる思いがするが、本人はケロッとして「だって料理楽しいもん」

とにっこり。できることを最大限に楽しんで生きる姿は、周りの人まで元気にする。

障害がなくても年を取ると誰でも身体能力が落ちる。母は最近、体力や気力のあるうちに「住み続けられる家づくり」を始めることを勧めている。例えば広めの廊下やトイレ、緩やかな階段など、いざというときの仕掛けを作っておけば、もし自分や家族に変化がおきても住み慣れた我が家を離れずに済む。できるだけ長く自分で身の回りのことができるような家、そしていざ介助が必要になったときには介助のしやすい家にしておく。これは一種の保険のようなものだ、というのが母の持論だ。

大好きな阿蘇に大好きなじいやんばあちゃんはずっと住み続けたいから、そして障害を持つ友達にも気軽に訪ねてきてもらいたいから、私たちもこの本を参考に将来のことを考えてみようかな！考え始めるのに「早すぎ」はないはずだから。(おあしす米生産者、NPO九州バイオマスフォーラム理事長)